

聖書：第一サムエル記 17章 23～29節

説教：真理を見分ける

2-1 アヒトフェル

1) ダビデを裏切る

ダビデの息子アブシャロムは、イスラエルの王座を自分のものとするために軍隊を率いて立ち上がり、エルサレムに入城を果たしました。ダビデは、大急ぎでエルサレムを脱出していくのですが、家来たちは次々とダビデを見限り、アブシャロムの側に寝返っていきます。

そのなかでもっともダビデにとって痛手であったのは、アヒトフェルの裏切りでした。アヒトフェルはずっとダビデの右腕として仕えてきました。アヒトフェルの助言で危機を乗り越えることもたびたびでした。ダビデにとってアヒトフェルはなくてはならない存在となっていました。そのアヒトフェルがアブシャロムの側についてしまいます。知らせを聞いたときダビデは、泣きながらはだしでオリブ山を登り、こう祈ります。「主よ。どうかアヒトフェル助言を愚かなものにしてください。」ダビデがどれほど衝撃を受けたのかわかるでしょう。

2) ダビデに関する情報を高く売る

こんな質問は少々面食らうと思うのですが、仮に皆さんが自分の味方を裏切って敵の側に寝返るとするのなら、まず何を考えると思いますか。いきなり敵のところに行ったとしても相当怪しまれるはずで、簡単に信用してくれない。ではどうするか。敵が大喜びしそうなものを持って行くのです。

アヒトフェルは、ダビデの強いところをも

ちろん、どこが弱点であるかも見抜いています。ダビデに関するすべての情報を知り尽くしていた人です。アブシャロムがのどから手が出るほど欲しいのは、ダビデの情報です。情報を制したものが戦いの勝利を手にすることができる。それがいつの時代でも変わらない鉄則なのです。アヒトフェルはダビデに関する高度な機密情報をお土産にして、アヒトフェルに迎えられました。

3) 自分の案が採用されない

アヒトフェルは新しい主人アブシャロムのもとで、次々とダビデを追いつめていくための作戦を実行し、めざましい成果を上げていきます。アヒトフェルは立身出世の階段を確実に上っていきます。彼の将来は約束されたも同然。誰もがそんなふう信じて疑いませんでした。

そんな絶好調の波に乗っていたとき、思いがけないことが起きます。エルサレムから逃げたダビデをどのようにして捜し出し、殺すか。その作戦会議が開かれたときのことです。席上、二つの案が検討されました。一つはアヒトフェルが出した案。もう一つはダビデの友と呼ばれていたフシャイが出した案です。結果は、意外にもフシャイの作戦が採用され、アヒトフェルのは却下されてしまいます。

今日の箇所 23 節で、「アヒトフェルは、自分のはかりごとが行われぬのを見て」とあるのはこのことです。彼はこのあと、自分で命を絶ってしまいます。

皆さんも経験があると思いますが、自分の

アイデアが採用されなくて少し落ち込むことはあるでしょう。けれども死ぬほど絶望することはまずありません。ところがアヒトフェルは自分の案が採用されないことを苦にして死んでしまいます。

なぜでしょう。この件で、アヒトフェルが窓際に追いやられ、出世の道が閉ざされた、ということではないでしょう。理由は別の所にあるように思います。彼は、世に並ぶものがないほどの知性と判断力を持っていました。「あいつは天才だ」と子どもの時から言われ、エリートコースを順調に登ってきた人です。一度も挫折したことがありません。それが人生の中で初めて挫折を経験してしまいます。そういう人は一度失敗しただけで、自分の人生がすべて否定されてしまったかのように受けとめてしまいます。

私は昔、アヒトフェルのように、世の中を観察し、分析する目を養い、知性を身につけるなら必ず幸せになれるはずだと思っていた時期があります。ところが、高い能力を持った人でもアヒトフェルのような結末を迎えることがしばしば起きてしまう。いったい何が人にとって幸せなことなのかと考えさせられます。

聖書はなんと言っているのか。次にダビデのところに駆けつけてきた人たちに目を留めてみたいと思います。

2 バルジライ

1) ダビデと民のために

ダビデはエルサレムを脱出した後、いろいろな人たちの協力によってヨルダン川を東側に渡り、マハナインというところまで逃げ延びることができました。全体でおそらく数千人規模だったと思われます。今で言えば難

民のような状態です。ゆっくり休める家もなければ食料もない。神に選ばれ、イスラエルの王であるダビデでも、さすがに自分ひとりの力ではどうすることもできません。明日からの生活をどうすればよいのか、途方に暮れるばかりです。

そんなダビデのところへ三人の人が尋ねてきました。彼らの名前は、シヨビ、マキル、バルジライ。手ぶらではありません。難民キャンプの人たちのことを心配して、たくさんの食料と生活道具一式を運んできました。これだけのものを用意するには、相当の資金が必要です。とても普通の人ができるものではない。その種明かしは、19章32節に出ってきます。「バルジライは非常に年をとっていて八十歳であった。彼は王がマナハイムにいる間、王を養っていた。彼は非常に富んでいたからである。」

バルジライの信仰のことについて考えたと思います。今イスラエルは国を二つに分けるような争いの中にあります。ダビデにつくのかアブシャロムにつくのか。みな浮き足立っています。アヒトフェルのように権力のど真ん中にいる人たちは、白か黒かすぐにはっきり決めなければならないかもしれません。けれども、地方に住んでいてそれももう高齢であるというならば、あえて危険を冒すような選択はする必要はありません。ダビデが勝つのか、アブシャロムが勝つのか決着がつくまで、外野席に座ってじっと様子を見ていればいいのです。決着がついたら勝ったほうの王さまに貢ぎ物でも持参してお祝いを述べれば良いはずで。さういふのを高みの見物と言います。

ところがバルジライは、さうしない。もしかしてダビデは負けるかもしれません。先は

ないかもしれない。それなのにこれだけの犠牲を払ってダビデを支えようとしています。もしこれでダビデが負けてしまえば、お金をどぶに捨てることになるだけではなく、ダビデを助けたということでアブシャロムから厳しい制裁を受けることになるでしょう。そんなリスクを背負いながら、なおもダビデを支えようとしています。なぜでしょうか。

2) マキルの証し

そのことは、いっしょに来たマキルと関係があると思われます。マキルがどんな人であったのかは、9章4節のところに書かれています。それには少し説明が必要です。

ダビデにはヨナタンという親友がいました。親兄弟は違うのですが、信仰から言えばまるで双子のような存在です。ところがヨナタンは戦いに倒れてしまいます。ヨナタンにはそのときまだ小さかった子どもメフィボシェテがいました。そのメフィボシェテを引き取って育てたのがこのマキルでした。

国内の混乱がおさまり、少し落ち着きを取り戻したとき、ダビデは親友であったヨナタンとの約束を果たすために、メフィボシェテを捜し出して、マキルから引き取り自分の家族のように迎えていきます。マキルは、その一部始終をそばで見っていました。

高い地位にあつて、口ではりっぱなことを言うけれど、中身のない信仰の人は沢山いました。けれどもダビデだけは違いました。ヨナタンが死んでから何年も経ています。けれども、あのときのヨナタンとの約束をダビデは忘れない。彼は今はイスラエルの王です。けれども誰の前でも高ぶりません。謙遜であろうとします。マキルは、そんなダビデの姿を見ました。彼の中に、ほかの人にはない真

理があることに気がつきました。マキルは、ショビヤバルジライにそのことをずっと証ししていたのだらうと思います。

3 真理に立つ

バルジライは、ダビデがエルサレムから逃れて、自分のそばにやってきたことを知りました。ダビデは、疲れ果て、みずぼらしい姿をしています。肉の目では何も良いところは見えません。正直に言えば、最初は関わりたくないと思いました。でも、マキルが話していたことを思い出します。もしダビデの中に真理があるというのならば、どうだろうか。そう考えてもう一度思い直してみると、肉の目には見えなくても、霊の目で見るときにダビデの中にキリストが見えてきました。ダビデ一人ではない。ダビデといっしょにいた民たちが疲れてお腹を空かしていました。もしそこに真理があるというのならば、自分も命をかけるべきではないだろうか。そのように迫られていきます。

先ほどアヒトフェルのことを見ましたが、バルジライと比べてみるといろいろな違いが見えてきます。アヒトフェルはまだ若く、知性と状況を判断することにかけては高い能力があると思われていました。勢いに乗っているのはアブシャロム。ダビデは先がない。ここで勝ち馬に乗らなければ自分の将来はない。そこで簡単に主人を裏切り、主人に関する情報を敵に高く売りつけます。アヒトフェルは肉の目に頼り、自分に有利なことがあるならたとえ主人でも売り飛ばしてきます。それは、世の人たちが信じている生き方そのものと言っていいでしょう。

いっぽうのバルジライ。高齢です。経済的には豊かな人でしたから、いまさら危険を冒

してなにかをする必要のない人です。ところが彼はあえてダビデを支えようと決心する。アヒトフェルは肉の目に見える損得だけしか見えていません。いっぽうバルジライはまったく別の所を見えています。肉の目では見えない「真理」を見ようと思いました。

どんなに人もうらやむような知性と能力があつたとしても、真理を見分けることができなければ何の役にも立たない。本当にむなしいことを教えられます。ですから、私たちが願うことは、キリストがどこにおられるのか、真理を見分ける目をいただきたいということではないでしょうか。

もしキリストを見ることができると、誰がなんと言おうとも、いのちをかけてキリストにお仕えしたい願わされていきます。そう言うと、「それは難しい」と思うかもしれません。大丈夫です。キリストが私たちの罪のためにいのちを捨ててくださったことの恵みのすばらしさを知るとき、私たちのうち側からいのちの水がわき出していきます。「しなければならぬ」というのではなく、「誰がなんと言ってもやりたい」、そんな思いがあふれてきます。

バルジライは、ダビデを通してキリストを見ることができたとき、いのちの水によって生かされていきます。私たちも、真理を見分ける目、キリストを見る目を与えていただきたいと願わされます。